

オリンピックと人生

松田弘子

東京オリンピックのマラソンのスタート地点となる新国立競技場周辺を歩くこと、男子マラソン開始ちょうど一年前の二〇一九年八月九日午前六時、J R 千駄ヶ谷駅に私たちは集まった。

私は二〇〇六年トリノオリンピックを鳥のオリンピックだと思って、たぐらひオリンピックに無関心だ。であればマラソン会場であろうとなかろうといつもの路上観察として千駄ヶ谷(駅名は「ゲ」町名は「ケ」とシ



ンプルに向き合えばいいんだけれど、問題山積の東京オリンピックには反対なので、思考がマイナスに傾く。

すでにだいぶ暑い。これでマラソンは無理だろう。通りすぎる人が皆そう考えている気がしてしまふ。かっこいい建物を見て、建設中の新競技場と比べてしまふ。

そのとき向こうに看板が見えた。「株式会社 セラビ」。セラビとは、セラビとはもしやC'est la vieですが。「人生、こういうもんだ」、「あるよね、こういうこと」って意味ですよ、それを社名に！ しかもヴィンジャなくビ！ その書体で！ そしてロゴの感じと高揚する私。ヤマケンが言った。

「なんでCにしたらんだろうな」、「ロ」の中心にCの二文字があることに私は気づいていなかった。これは例えて言えば「That's a pen」という名前の会社のロゴがTAだったみたいなので、中心の名詞partが入ってないから「ペンはどこ行った！」「とつこまざるを得ない。たしかに。人生、こへ行つた！」

これこれ、この感じ。同じものをそれぞれが別の観点で見ている異なる観察や感想が出てくる。人と一緒に路上観察する喜びの一つである。

不動産、伊藤忠商事、日本スポーツ振興センター、高度技術社会推進協会、日本オラクルが地権を握っている。(三井不動産が開発の主導を担っているようだ)。自然豊かな歴史と生態系を踏まえた、「本物の杜」。そんな



形を目指していたようだが、そんなの魂もどこかに消え去ってしまった。現在感じるのは地権者の利権利権・・・オリンピックという利権でどどんと塗り重ねられていく東京を感じるので。

パチリと撮つたこの一枚。うまく撮れたなと思う。明治神宮外苑のスケートリンク。昭和レトロな哀愁漂う。そしてその前を歩く悲壮感が漂う作業の方たち。さて東京の未来はどこへ向かうのでしょうか？

沖田総司が通りを眺めてる

山内健司

朝6時過ぎ、新国立競技場の工事へ向かう労働者の通勤の時間とちょうどぶつかった。はあ、この人たちがここで働いている人が、俳優としてこういう機会は大好物。最近、街角の

美しいビルは地下鉄エントランス建設中の競技場むなし

松田弘子

それは今回も健在だった。健在でよかった。オリンピックがあってもなくても、C'est la vieと軽やかに生きていきたい。

夏のスケートリンク

鈴木健介

8月9日朝の6時。すでに暑い。千駄ヶ谷駅の周りには我々と同じく来る年のオリンピックに合わせてか、集まっている人がチラホラ見える。「オリンピックに向けて東京はどのようになら変わるのだろうか?」その変貌を知りたくてオリンピック前の新国立競技場を歩いてみる事になった。

2020年を境に新しく生まれるものもあれば消えていくものもあるだろう。あてもなく我々は新国立競技場の周辺をぐるりと歩いた。工事真っ最中の競技場にはこれから仕事

工事現場で背中の丸い高齢の労働者を見かけることが多いけど、ここは精悍な若い人が多い。海外から来ている人が多いのかなあと思いきや、そうでもないさ。中高生部活男子の定番、たつぷりサイズの大容量水筒をみんな持っている。これはつまりギヤラのいい現場なのかな。

まあとにかく超巨大な工事現場、身も蓋もなく金なる木がそこどこかんとある。僕たちの国はこんなに景気よかつたっけか。ここは渋谷川の源流。渋谷川を復元して公園にする計画はどうなったんだろう。5年前の代々木オリンピック競技場も渋谷川の源流。桑沢アザインの下、原宿川からちよここと食い込む短い支流の源頭は、昔、岡部ヶ池という水害をおこした池があつて、そのせいで源流にはなんと第一体育館オリンピックプールが配されている。ああ、あすこいな丹下健二。

「暑いね」「うん暑いね」と話しながら

らマラソンコースをたどって坂の上へ向かう。

もうすぐ8時、スタートから2時間、そろそろトップランナーがこの通りに飛び込んでくる頃。渋谷川が新宿御苑にクツと入り込むあたり、明白



ちよここ一服短歌

千駄ヶ谷の朝日の中を二リットルの水筒さげて現場へゆく人

松田弘子

ちよここ一服短歌